



丹波與作待夜の小屋節

近松門左衛門作

地大名に生るゝ種の一粒が。何萬石ぞ幾

萬人胎の内から敬ひて。持てはやしたる舌

鼓丹波の國の一城主。由留木殿のお湯殿子

フシしらへの。姫はお國腹。地金水引の初

元結まだ十歳の襦袢も。すらりとしたる

生れつき東の高家人間殿より。御養子分の

約束にて昔からとる花嫁御。御迎ひの諸

侍。五千石を頭にて。騎馬が甘騎稚兒醫者

は御輿つき。大上臈小上臈おさし抱き乳母

御乳人。中臈下臈の供乗物陪卒駕籠はいろ

は付。以上四百八十挺金銀瑠璃枝珊瑚珠。

研出し蒔繪の長柄の傘長刀袋傘袋。時代の

金欄鶴菱褌。花兎裏に霞大内桐。覆

ひかけたる袂箱濃紅の太紐を。高々と

結びしは。フシさかりの牡丹に異らず。地臺所

荷は次傳馬御葛籠荷物を通し馬。三十駄の

馬方の小唄がなつて小綺麗な。聲のよいの

を選られしも。フシ金に。飽かせし吟味な

り。地刻限は巳の上刻との定めにて。御迎

ひの奥家老本田彌三左衛門。數獻の盃足許

はよろくと。狸々緋の道中羽織白い所は

髪ばかり。きんか頭に顔色も糯珍の裁着涼

々しげに。鬨なんと。御供廻が揃つたら。

お先手から乗り出しめされ。是さ文左源五

左。身は押へを乗り申す萬事夜前申し渡す

通りだ。若黨中間荒小者に至るまで。大

酒を致さぬやうに。馬次舟渡し等にて。豪

氣粗暴を仕つたらば曲事でおじやんべい。

又とさ。泊りくの赤前垂にじやらくら致

さないやうに。第一お乗物の先で見苦しい。

さりながらとさ。長の道中下々が退屈致

すべい。若し濡などを企つるとも。目立た

ぬやうに物陰へよつて。ちよこくちよこ

ちよこ濡れたがよくおんじやる。目出たい

折柄と申し殊に女中のお供だ。少々の事は

見通しにして置きめされつちや。地あつと

答へて宰領ども。サア御立ちと催すところ

に奥より女中聲々に。調ア、待たつしやれ

く。氣の毒やお姫様關東へ往くことは。

いやぢやくとやんちやばかり御意なされ。

地お袋様も殿様もたらしつ此つ。遊ばせど

も。どうでもいやぢやとおむつかり。お乳

人の滋野井殿色々申されても。それほど

江戸へ往きたくば乳母ばかり往きをれと。

調お乳人の背中をとんとんと撲たしやんし

て。地御機嫌が損ねましたといふ處へ。眉

泣きはがし姫君は江戸も東もこちやいやぢ

や。おれば往かぬと泣くく。走り出で給へ

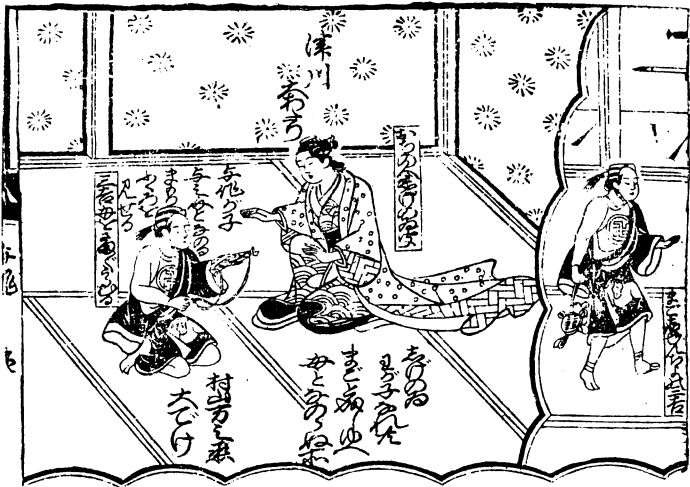
ば。侍衆も下々も。御門に駈出で家老の

外。フシ男ぎれこそなかりけれ。調お乳人色



せんせ。百里あちらの山川越えて置いて往かんせの。フシ放ちは遣らじと泣きければ。阿、おきやく。お大名のみやづかへ箒の組でもうたはいで。誰に習うてはでな唄姫様などに教やんな。地必ずおいて貰はうとお乳人の不機嫌さ。本田も餘り詮方なく申しお姫様。あれは人の口てんがう花のお江戸は京優り。浅草上野の花盛りまた堺町木挽町の。てんつくく木偶。辨慶や公平が。ゑいやつとゑいなどと地切合ひを見せませう。道中の面白こと富士の山と申す。天までとく山を御目にかけまする。サアお輿に召しませいと力一ばい賺しても。いやく江戸へは往きはせぬどうでもいやちやと泣き給へば。お乳も今はあぐみはて。どうしてよからう御家老もフシ呆れてこそは居られけれ。地お仲居の若菜は旅出立に菅笠持つて門外より走り入り。圓なお乳人様面白ことがござります。十ばかりの剃下けのちつほけな馬方が。道中雙六とやら東海道の繪を廣

入間殿の總領嫁御と。侍かれるお身ぢやぞや。お乳の育の難になれば。女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ。地サアよいお子ぢやお輿に召せと。威してもそやしてもいやく皆のだましぢや。なんの東がよいところ腰元どもが謠ふを聞きや。サアみんなこへ出て。いつもの歌をうたへくとせめ給へば。お伽小性の頑是なし十二三なが手を揃へ。歌山も見えざるかりそめに江戸三界へ往かんして。いつ戻らんす事ぢややら殺し



け。あちな事して遊びま
 す。御機嫌直しにお目にか
 けなされませ。ヲ、くよ
 うぞ気がついた。それは聞
 き及うだ道中の繪を見せま
 し。お心も移るため馬子で
 も子供は大事な。お許し
 ちやその丁稚に。持つて参
 れと呼うでおちや。心得ま
 したと御門に出てオクリ連立
 ちへ来る馬方がッシ片肌ぬ
 いで。地さばき髪お前近く
 も無遠慮に。椽先にあげ足
 して。綱やれくあり様
 違はあつたばこしゆもない。
 傍輩どもと賭け徳に道中雙
 六打つて。沓の錢ほどしてこ
 ませうと思つたに。人呼び
 廻つてなんでやる。はれや
 れやれくきりく。地乗ら
 つしやれッシ馬やろいとぞつかうどなる。地
 さてく利口な野郎ぢやな。船頭馬方お乳
 人こちもそちいも同じこと。して年は幾
 つ名はなんと云ふぞ。年は今年十一。五つ
 の年から馬追うて一代若衆にならずに。は
 えぬきの念者ぢや所で名はじねんじよの三
 吉。さてもよい名ぢや聞けば道中雙六があ
 るげな。腰元衆も搏つて見や姫様も遊ばせ。地
 サア三吉もこへ来い苦しうないと呼びけれ
 ば。あいと云ふより慮外をもちへり短き煙管の
 煙立交りたる女中の傍そくはぬ様にも見えざ
 るは。さすが重の一徳と。繪を取り出し雙六
 をオクリ皆打ち交り遊ばる。

道 中 雙 六

地これく御覽せ樽たしやんせ。是こそ五十三
 次を。居ながら歩むひざ。膝栗毛馬。はいしる
 道中雙六。南無諸佛分身と。書いた六字を六
 角の骰子は櫻木花の都をまん中にシ思ひく
 のしるしを置いて。さらばちから打出の濱。大
 津へ三里こて矢橋の丹賀がオクリ出舟へ召せ召

せ召せ旅人の。フシ乗りおくれじとさ草津。地お姫様より先づ姥が餅。一口二口みな口繪躍りこえ。坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれく。ふるや鈴鹿を跡に下れば負けまいとせきに關より。フシ龜山に煙草。火打の石樂師。おつと桑名の舟渡し。宮へ上れば池鯉鮒へ四里の。宿にころりは。歌岡崎女郎家。く。岡崎女郎家と。もつれ寝よやれ藤川に。思ひくの君待ち受けてオクリ解く前へ垂の赤坂や吉田二川。歌白須賀ちよいと越えて。手判ござるか。振袖に地ヤこのこの。新井今切。舟に召せく。蛤召せの。蛤々濱松まで。舞坂三里ナ地馴染見附の。フシ泊りと聞けば。誰も惜まぬ。縞の財布の袋井や。乗掛川を飛びおりて。機嫌笑顔やサア日坂の蕨餅。腰なはなんぞ日本一の大井川。骰子に無の字を打出せば水の出ばなの八十川の島田。金谷に二日のよどみ。仕合よしの旅すこ六里。七里八里もただ一足に。先へくと咲きかゝりたる。藤

枝岡部瀬戸の染飯。フシ宇津の山邊の十圍子。フシ所々の。名物買うておあしつくくつく手鞠子に。ひいふうみいよ。府中江尻にすつとんく。とんと打つたるフシ興津波。フシ松原はる。蕎麥賞うて月を吸ひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の花の蒲燒名物の。鰻のはだへフシ沼津の宿。三島越れば箱根へ三里。地骰子目次第に關越ゆる。悪い目打てば手判を取りに。元の京へ立ち歸る。合點かヲ、のみこんだ。小田原外郎大磯平塚藤澤の。さはりもなしに雙六のハツミさいさき。もよし門出よし。道中早めてとつかはと。急ぐ程が谷神奈川越え川崎を越え品川越え。まづ先驅のお姫様。一番勝に勝色の花のお江戸に着き給ふ。一のうらは雙六の幸ひあり悦びあり。慰みありける道中とフシとつと。奥にぞ入り給ふ。地お傍の家に囃されて幼心の姫君。かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サアく往かうはや往かう。ヤアこいさうと

仰しやるか。そりや目出たいはく。地またもや御意の變らぬ間に。行列揃へと立騒ぐお乳人は勇みをなし。そんならま一度大殿様お袋様とお盃。是も馬子殿おかげぢや出来いたくそちには禮いふ褒美やる。そこ待ちややとさやめき渡りフシ奥に御供し入りにけり。地馬方は遂に見ぬ金の間をうそくと。覗き廻れど庭の外踏みも。習はぬ備後表。同エ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも。地こつちの内が結構でござると。フシ獨言して居たりけり。地お乳人は大高にお菓子さまぐ文匣に盛り入れ。同どれどれ三吉そこにか。まあくそちは健氣の者ぢや。地道中雙六お目にかけてそれ故に姫君様。お江戸へ御座ろと御意なさる。お上にも御機嫌。是は御前のお菓子有難う頂きや。お錢三筋買ひたい物買やや。殊にそちは通しぢやけな道中すがらも用あらば。お乳人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに馬

方させる親の身は。よくくで有らうと
フシいと懇の詞の末。三吉つくく聞き
すまし。由留木殿の御内お乳人の滋野井
様とはお前か。そんなりや俺が母様と抱
付けばア、こは慮外な。汝が母様とは馬方
の子は持たぬと。擁放せばむしやぶり
付き引退くれば縋り付き。何の無い事
申しませう。私が親はお前の昔の連合
この御家中にて番頭伊達の興作。其の子
は私こな様の腹から出た。興之助は私ぢや
わいの。父様は殿様のお氣に違うて。
國をお出なされたは三ツの時でおる覺え。
杵掛の乳母が咄には。詞母様も離別とや
らで殿様に御奉公こなたを。乳母が養育
し父様に逢はせたい思へどもかひもない。
母様の細工の守袋を證據に。由留木殿
のお乳人滋野井様と尋ねよと。懇に教て
て乳母はおれが五つの年。久しう痰を煩う
てあけくに烏羽の祭りに往て。餅が咽に
つまつてつひに死んでのけました。在所

の衆が養ひてやうく馬を迫ひならひ。今
は近江の石部の馬借に奉公します。是守
袋を見さしやんせなんの嘘を申しませう。
お前の子に紛れはない外に望はんもない。
父様を尋ね出し一日なりとも三人一所に居
て下され見事杵も打ちます。この草鞋も
わしが作つた。晝は馬を追うて夜は杵打ち
草鞋作り。父様母様養ひませう。父様と一
つに居て下され。拜みまする母様とステテ取
付き抱き付き。泣き居たり。お乳ははつ
と氣も亂れ。見れば見る程我が子の興之助
守袋も覺えあり。飛び付いて懐に抱き入れ
たく氣はせけども。アツア大事の御奉公養
ひ君のお名の瑕。偽つて叱らうかイヤ可愛
けにさうもなるまい。まあちよつと抱きた
いア、どうせうと。百千色の憂き涙。二ツ
の眼には保ちかね。フシむせび。沈みて居た
りしが。いやく我が子ながらも賢しい者
詐つて誠とせず。母を心のきたない者と蔑
まる、も情なし。譯を語つて合點させ恥し

めて歸さんものと。涙拭つて氣を鎮め愛へ
來い興之助と。引寄せて兩手を取り。さ
ても大きうなりやつたの。とても成人せう
ならば。侍らしうなせ尋常にも育たぬぞ。
顔の道具手足まで母はかうは生みつけぬ。
美しい黒髪をこのやうに剃下けて。手足
は山のこげ猿ぢやほんに氏より育ちぞとッ
又さめくと泣きけるが。これ物を合
點しや。腹から生んだは生んだれども。今
では子でも母でもない。あさましうなり
下つたを嫌うて云ふではさらさらない。こ
この譯をよう聞きや。母はもと御前様
の奉公人。興作殿は興小性互に若木の戀
風に。摩れつもつれつ一夜が二夜とたび
重り。通はせ文をお次に落し小性目附に拾
はれ。武家の作法と云ふ内に殊にお家は御
法度厳しく。御家老衆の評定父も母も御
成敗と極りしを。御前様の御身に代へお
命かけての御訴訟。殿様の御慈悲にて科を
赦され其の上に。表だつて夫婦になされ興

作殿は段々に。奏者役番頭千三百石迄お取立。地追腹程の御恩の家其の間にそなたを儲け。は姫様御誕生御内證のよしみにて。母が乳を上げまし首尾さへよければそなたも今。家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人。情なや父様は江戸詰の山谷通ひ。大事の所を仕損ひ又切腹に極つた。なれども腹を切らせては女房お家に置なれぬ時には。大事のお姫様の乳放れ御病氣も出ればいかゞとて。母を其の儘残さうため父様の命助かり。奉公構の御改易其の時母も一所にのけば。尤も夫婦の道は立つお姫様乳放れ。お苦しみをかけまし身に餘つたお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん残つて御恩を報じてくれと。父様のことわりゆる第一は男のため。夫婦の義理を忠義にかへて。あかぬ離別をフシしたわいの。男の子は幼うても御勤氣の末氣遣ひな。地與作が子とばし云やんなやサア早う御門へ出や。アゝいかなる因果な生れ性。現在

我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が母は衣裳を着飾つて。お乳人よお局よと玉の輿に乗つたとて。是が何になる事と。賢くて聞分け有る程なほ泣き入り。悲しい咄を聞きましたさり乍ら常に乳母が申し。たは。姫君様と私とは乳兄弟の事なれば。母様にさへ這うたらば。父様も出世なさる山。御訴訟なされ下されかしと。言へばちやつと口を押へアゝゝ勿體ない。の乳兄弟いはぬ事。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間てい。馬追が乳兄弟に有るなどと。どう妨にならうやら蟻の穴から堤も崩れる。軽いやうで重い事ひそひそ言うて人も聞く。まづ早う出てくれと泣くく言へば三吉。母様餘り遠慮過ぎました。先づ云うて見て下され。未だ云ひ居るか聞分けない。夫の事我が子の事母に知すが有るものか。合點の悪い聞き分けないと制する内に奥より。お乳人はどこにぞ。御前から召しますと呼ばはれば。あれ聞きや人が来る出てたもと。手を取つて引き出す不便や三吉しくしく涙。頬冠して目を隠しを杏見まつべて腰に付け。見すほらしひな後影。こりやま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな雨風雪降り夜道には腹が痛いと作病起し。二日も三日も休んで煩はぬやうにして。たも。毒な物喰はずに下痢や麻疹の用心しや。可哀のなりやいたくしや。千三百石の代取りがなんの罰ぞ咎めぞと。式臺の段箱に。フシ身を投げ。伏して歎きしが。中の有合ひ一步十三服紗に包み。是嗜みに持つて居やと。涙ながらに渡さるゝ三吉見返り恨めし氣に。母でも子でもないならば。病まうと死なうといらぬお構ひ。其の一步もいらぬ馬方こそすれ伊達の與作が絶領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈がない。エ、胴慾な母様覚えて居さつしやれ

と。わつと泣出す其の有様母は魂消え入

りて。養ひ君お家の御思はずはさて一人

子を手放して。なんの遣らうぞ奉公の身の

あさましやと。フシ聞えこがれて歎きける。

地時に奥口ざゝめいてはや御立と姫君の。

御輿昇きあけ行列立て。お乳人の乗物を

フシ直付にこそ昇き寄せせけれ。地お乳はさ

あらぬ顔つきして姫君のお伽に。最初の馬

方をこの乗物に引き付けお慰みに諠はしや

畏つたと幸領ども。こりやそこなじねんじ

よ奴。諠ひをらうとぎごつなく。ヤア此奴

はほえをるか。地なんぢやこりや忌々しと。

握り拳を二つ三ついたゞきながら泣聲に歌

坂はてるく。鈴鹿はくもる。土山あひの。

あひの土山雨が降る。地降る雨よりも親子

の涙中に。しぐるゝ三夏雨やどり。

中之巻

これ泊りぢやないかえ泊りならとまらん

せ。とまらんせ。旅籠安うて泊めませう。

上旅籠中旅籠お望み次第すき次第。地椀家

具も綺麗な座敷はこの夏表替へ。寢道具好うて

酒好うてお茶は上々木質でなりと。据風呂もし

やんくかゝり湯取つて加減見て。旅の汚

れのおあつきは七つ立ちか八つ立ちか。枕

のお伽が御用ならば振袖なりと詰なりと。

足さすつて腰打つて。吸付煙草の煙管の

雁首。首筋もとからぞつと庄野の六藏でな

いか。地よい女郎衆乗しやつて足許が軽い

の。置いてたも地ア、しやらくさづの三介

三藏。石部金吉泊りなら泊めてたも。なん

ほ先へ行かんしても旅籠屋は皆一つ。同じ

音を啼く鶯の春はござれの伊勢衆でない

か。目許にしほがこぼれるこゝへ見える坊

様は。この暖かなに紙子着て仙臺の坊様か。

あの旅人は京の八幡の生れやら。足に牛

蒔の毛がむくくぢや。向ひ通る菅笠様足

許腰元身のまはり。すつきり綺麗に掃いた

様なはフシ伯耆の國の人と見た。地是々こ

こな若衆様。地越後衆か明石か鬢がちつく

りぢやんだ。地あれへ大名一かしら。瓜ざ

ね顔の旦那殿東寺から出た人さうな。跡か

らござる角前髪吉野の家かはなが見事。こ

れへ見えた飛脚の。足許のねばいは三河者

に極つたぞ。常陸の衆は帯で知る。是爰な

奴殿。地越中の國の人と見たなんで見たれ

ばこの下紐を。解いて一夜は泊らんせ夕暮

はフシ急ぎの人も呼びとむる。地色こそ道

の關の地藏白子屋の左次が内。小まん小女

郎小よしとて百廿里の名取ども。人呼ぶ片

手の袖の下麻小笥の掛匣底意には。戀に心

をひねり麻の。麻袴みだいに胸のフシ中な

んと奈良麻の憂き身ぞや。地なう小よし小

女郎。かうした勤め様々あれども。君傾城

と云ふものは此の類での王様。それから段

々ある内におじやれの身には何がなる。朝

の夜から見世ざらし晝休みから泊りまで。

葦原雀の啼く様に息のありたけしやべつ

て。それでも泊り人あることか。どうした

事やらこの頃は一膳盛の客さへない。地隣

にはあのやうに大名のお姫様。今日で三日

の逗留宵朝百六十人。どつばさつばと忙が
しいこれの内はいかな事。下宿さへ泊りが
無い晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のなが
い顔日頃生えた角に股がさかうぞなう怖
や。常に最良な馬子衆も。こんな時に容引
いてくれそなものではないかいの。聞それ
について小女郎。そなたのおてき松坂の七
二はなんとして見えぬぞ。口説でもしや
つたか。梯子の下のそこそくが過ぎて氣
色でも悪いか。地あんまりこそくこそつ
いて。馬は追はいでおとがひで。フシ蠅追や
ろぞやと云ひければ。聞ム、其の七二とは
九郎助の事か。それは未生以前で今は挨拶
きりんぐす。しいと云ふ馬追聲も聞かぬわ
いの。始めはたんとかわいうて元結の脚
絆の。髪附買ふの帯買ふの杏の錢まで續
けた。聞其のわしが目をぬいて。一人か
二人か水口の火繩屋のおけん。また土山の

くし屋後家。庄野のふとのお米が俵腰に
食ひ付いて。馴染のおれをすほんぬきに

逢はせた。地それも云うたら止むにもせい
ほででんがうの貧乏神。何もかもほつきあ
け今は布子と襦袢と。たつた二枚の四九を
やつて。親方の駄賃の算用も立たぬけな。
聞聞けば小萬の知音の與作も博奕の友ぢや
けな。與作がいとしか意見しや。小よしも
取沙汰聞きやらうと云へば小よし小聲にな
り。されば内の旦那が龜山の問屋で聞いて
來て。これの小萬がねんごろする馬方の與
作奴は。博奕打の大將ぢやあれから盗みの
下地ぢや。重ねて來たともあしらふな餘程
彼奴に慇もある。丸裸にしてなりとも慇を
取つてそれからは。門詰も踏ませまいと女
夫呼き領いて。地寄合に行かんしたと語り

もあへぬに小萬はらく涙にて。勤めの身
にもおじやれの身は。下の下といふは、フシ
ここのこと。地傍輩衆へもいはなんだ。
横田村の父様二石二斗の未進に詰まり。六
十六で水牢男にも娘にも。子とてはこの身
ばかりなり。しよざいこそ出女なれ。お大

名へも知られた關の小萬が父親を。水牢で
は殺されず參宮するとして暇もらひ。聞女子
の身で代官所を秋納めまで請合うて。牢を
出しは出したれども何をあだてになんとせ
う。前の様に容は勤めず私仕事に貸さう
み。地女中泊りの袖の下小萬といふ名で
ほつくと。鶴のおはれやあさましや請合
の日は近付く。氣が勇まねば身も瘦せて辛
苦するのもある人の。身をもくろめて遣り
たいの念力一つで立てる身が。世間で悪う
うたはれて眞實けもなき浮世やと、フシ小
笥に。平伏し歎きしが。地あれく、あ
そこへ諺うて來る本小室の引拔は。與作
々々と小手招き。歌さても見事なソソレハ
おつら馬や。七つ蒲團にソソレハ曲糸据
ゑて。我も昔は、フシ乗りし身を。地人は
それとも白子屋の見世先に馬引付け。聞こ
りや小まん此の旦那殿馳走して泊めまし
や。お供かけて三人ぢやサア下りさつし
やれと。地荷物とく小女郎小よし取々にそ

れお足の湯まづ奥へ。合宿もござりませぬ
廣々と。お休みなされませと、フシ奥に伴ひ
入りにけり。地與作は荷物も跡付もそこ
くくに投げ下し。小萬この中逢はなんだ無
事で嬉しいやがて逢はうと。馬の口取れ販
出す手綱に縋つてこれなんぞ。詞語る事が
たんとある此方も云ふ事ある筈ぢや。地そ
はくせすと待たんせと引戻せばエ、じや
まな。其の咄はいつでもなる急なことぢや
遣つてくれと。振り切れば抱きとめて是
どうぞいの。何がそれ程忙がしいどうで心
に一物有る。譯を聞かねば遣うはせぬと見
世にとんと抱きすゑられ。馬ハテ荷物さへ
卸したに一物があるものか。氣遣ひさうな
に短う話して聞かせう。この不仕合を聞い
てたも。傍輩どもがけんねじついで錢儲け
する羨しさ。瀬多の久三が筒の時百切り
はつて見たれば。勝つ程にくく一いきに七
百。地こりや門出が面白いと腰に引つけ。
しやんぐ、
吟鹿、皆ついでゐる。こゝ

へもちよつと出かけて又六百してやつた。
是で置けばよい物を慾には見えぬ目川村
の。馬子ども寄せて我等が筒を取つたの。
當らぬかく畫さがりから七つまで。一文
と六文の錢の顔を見ぬ程に。前の勝を打ち
込んで五百あまりの爲過し。どつこいと
こぞで此の損を梅の木のは齋の辻で。身を
粉にはたいてやつて見た。和中散でも利く
にこそ。金に直いて一步二朱の借錢負う
て。肩の重たい石部の八藏に請合うて貰う
た。是をいくさの始めとして大津八町で八
百負ける。小野の宿の小町塚で九十九文し
てやらる。麻針峠の氣が細うては勝たれ
ぬと。へそ村の上で分別仕替へ守山の觀音
堂で。卅三匁が質置いて心は鬼神と出たれ
ども。土山の田村堂でつい平けてのけらる
る。伊勢へ通しに行つた時宵から曉の。
明星が茶屋で飲み干す様大ぐさり。借
錢の利を一月に二月をどる松坂越えて。雲
津の渡しで算用したれば貳貫つゝ合せて。

二四が八藏めに八貫の借錢。是はならぬ
と思ふ所へ向ふから馬追うてうせをる。じ
たい八めはぶうくくなりおれが胸倉しつか
と取つて。地こりや貸した錢はどうする。
見忘れたか八ぢやくくと刺す様に云ひを
る。地くどくどと見苦しう詫言もしてゐら
れず。錢というて今はない正味で借つた錢
ではなし。數ばかりの勝負つく一ばん切に
突いて見て。八貫を濟ますか十六貫負ふも
のか。サア來いと云うたれば八めは數年の
通りもの。こちは八貫出して置く負ければ
それで取り遣りなし。勝てば倍して十六貫
なんで濟ます合點ぢや。抵當もなうてはい
やぢやといふこちも引かれぬ云ひががり。
是この馬を知つたか池鯉鮒の市で九兩一步。
親方の物なれど十六貫の代りに五百目の。
馬ならしてこいと木蔭へよつて錢握り。
サアどうぢやというたれば。三まいせい七
つぢやと二文張りをつた。まつかせとつく
程に手の内に残つたは。たしか七文南無三

寶しをつた。地一文はねて六文にして。あ
て、取らうと思つて一文しやんとくろめ
て。突いて見たれば悲しやの八文であつ
たもの。一文はねて七つにして彼奴が垂へ
あてがうたは。どうした因果のかたまり
こちやけんなりとなるほど。八めはいき
つて馬を取つたとしがみ付く。今日の乗
手は氏神約束の馬次まで。やれく〜とせ
がまるゝ八めも武士を乗せたれば。なぜ
馬を追はぬと目のぬけるほど叱られて。窪
田で旦那を下して追付け馬を取りに行く
と。早追ひほどに追つて来る親方の馬を
取られては。この海道は云ふに及ばず木
曾街道中仙道。佇みが叶はぬ八藏めが來
ぬうちに。はやう内へ往にたいと、フッ溜
息。ついて語りける。地小まん心もくら闇
にて人の沙汰に違ひない。世につれると
は云ひながらさもしい心にならんした。古
へはお歴々わたしら風情は下司にもお遣
ひなされまい。縁なればこそ肌ふれて抱

いつ締めつのわりないこと。嬉しいやら悲
しいやら、フッ一倍愛しき増すものを。悪い
病が付きましたそりや雲介の身持ぞや。友
達仲間の階合で引かれぬ事があるにもせ
い。わたしが親の未進米この六日の吉書に
立てねばもとの水牢。この世から八寒の地
獄へ落すわたしが心。苦にかけうではなけ
れども案じてもくだんせず。しこり博奕
の悪遊びさてもつれない氣と思へば。熱い
涙がこぼるゝとステセき上けく。泣きけ
れば。地與作わつと泣き出しそりや曲がな
いく。地慰みにも慙にもせぬそなたの親
の未進米。二石二斗は何程ぢやむかし與作
が草履取の切米。地是で可愛いそなたが親
を殺させはせまいと。瘦我をはつての出來
心千三百石から馬追迄。成り下るほんのく
ほよいことはない筈と。思はなんだは身が
不覺。是は主の天罰と諦めて済ますが。
しこり博奕の榮耀とはさりとほ小萬むごい
ぞや。皆是そなたの親のため胸に書付ある

ならば。こゝが立ちわり見せたいと打ち叩
いたる胸當もフッしほる。ばかりの恨泣き。
地小萬是はと手を合せ忝うござんする。と
うに云うてくだんせば恨むまいもの堪忍し
て下さんせ。地父様の出入も夏物ども人
手に渡し。傍輩にも無心云ひ百三十匁整
へ。まちつとの所は賃字もよつほどうみた
めた。地これ見さんせと芋小筒より金取出
し。父様の命代落付いて下さんせ。日が暮
れて間があるよもや八も來をるまい。泊
人はなし私も暇。馬は向ひに繋いで中の間
に寝ていなんせ。互の憂を散ぜうと草鞋の
紐解く所へ。石部の八藏きよろく〜目して
來りしが。地ヤノ與作か人の馬を斷りなし
に。美濃路まで隠れもないひぬかの八藏目
のあらい男知らぬかい。十六貫をたゞせう
や地どうすりめと。馬を解く手を飛びかゝ
り捻ぢあけてこりややい。地汝がひぬかの
八藏なれば俺は丹波與作ぢや。二百匁のか
たに五百匁の馬を欲しいか。遣つたら機

嫌がよからうな。三百匁のつりを持つて来い五十三次に汁かけて。咬みこなす與作ぢや。地すないやい。すないやい。フッはてつばらめと振りちぎる。地ヤイ男達はおいでくれ錢濟まいてしたかせい。腕づくならサア来いとぶつてかかれ小萬取付きなう八藏殿。同こなたは粹のやうにもないそつちもこつちも親方持。馬をやつてよからうか取つてこなたを褒めうか。地聲高に言はずとも料簡づくがよいわいの。情なやと泣きければヤイこゝな引きさかれ。同其の涙は與作に泣けこちや忝うないわいやい。取るべき錢は取らずに馬を取るが料簡ぢや。いやそりやならぬ。この門に繫いだ馬はこの小萬がやらぬ關の小萬がやらぬぞ。イヤ死女郎のふんばりめ竹の鞭を食らうなよ。ヲヲ女子を相手にならばしや。ヤアしかねうかと鞭を持つてはつたと撲つ。與作小萬を押し退けて。あれは餘所の奉公人なせくはした。ヲ、我が女房ぢや所でくらはした。

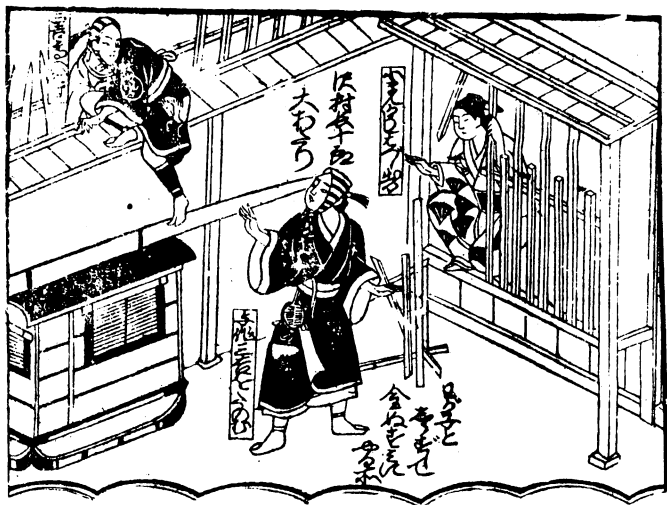
ム、よう食らはした女房どもの返禮と。地拳を固めて目鼻の間缺けてのけと打つたりけり。来いする氣ならして見せうと互に小柄を取つては投げつ投げられつ。撲つ撲つたれつ掴み合ふ。誠に馬子の喧嘩とて、フシ馬の踏合ふ如くなり。地八藏は力ばかり與作は捕手柔術とり。すりちがひに小腕を取り肘を蹴返しこりやあと取つて投げつくる。門柱に腰骨打ちよろめきながら睨みつけ。同どうすりめ覺えてけつつかれ。問屋馬差親方へ斷つて。海道筋の御器の實をぶちあげ。地蘆被かせて見せうすと身を捻ぢ振つて立歸る。小萬追付きこれ八藏殿。同公用勤める馬方が。馬差問屋へ斷られ。何處で身が立つものぞ。地この小萬が手を合せる男は當つて碎けいぢや。堪忍して下されと詫びる程なほつきり。同十六貫と云ふ錢貸して其の上に投げられて。堪忍したらそつちはよからが俺が悪い。與作奴の博奕博盗人とこの門からわめいて往く。なうこれ

くこゝに百卅匁命がはりの金なれども。地男の爲ぢや惜しうない是で濟まして下されと。取出すを引つたくり必ず跡も濟ませよ。同錢の値段はどうせうぞハアテそこらは構はぬ。そなたの勝手にしてたも。そんなら是で拾貫分。地相場は十三もんめん巾着捻ぢ込んでこそ歸りける。地小まんは小首傾け溜息ついで立歸り。さきの金を渡してやうくといなせた。彼等との附合重ねて置いて貰ひたいと。呟けば與作肝潰し。同其の金渡してよいものか。取り返さうと立上るこれ待たしやんせ。人の物負ひながら返さいでよいかいの。昔と違つて當代は道中筋も吟味強く。馬借問屋へ斷られ惡名が立てばどんくんと廢つて出入の門も塞がれば。おのづから逢ふ事もならぬ様になり果て。地萬お國へ聞えての恥辱は再び返らぬ。父様の未進も云ひ延べるだけ云ひ延べて。叶はずは水牢へ代りにわしが入る覺悟。差當つた男の難



儀教へばわしが本望と。云へども與作聞入れず馬方風情ふうけいになんの恥辱ちじよく。き身やつすは親のため其の金をやるものかと。断出でしが南無三寶なんぶさんぼうこりやならぬ。是の旦那の佐平次殿が何事か出来たやら。間屋組まぐみ中連立ちんたてちそれ其處へ戻らるゝ。なんの彼のがやかましいちよつと隠れて逢ひともない。馬も何處ぞへ引いてくれと隣の見世の幕の蔭。乗物あるを幸に戸を明け片足踏み込めば。内よりあいたあいたしこ横腹を踏みくさる。何者ぢやと小丁稚こてうぢが大欠伸おほあくしんしてによつと出る。■ヤア石部のじねん

じよか與作殿か。そちはここに何してる。おりや江戸へ通しの馬追うて本陣に泊るが。夕飯過ぎから眠たうてこゝでぐつとやつたもの。有様はこりや何事ぢや。いや氣遣ひな事ではない隣の旦那に逢ひともない。■こゝへ隠してくれと云へば三吉あたりを透し見て。■そこなは小萬かエ、うまいなうまいな。おりやとこから知つて居る。外の人なりやならぬが與作と云ふ名で愛しい。與作のことなら引きはせぬ隠してやらう。■サア這入りやと。膝押し合ひし心ざし。知らねど親に奉行のツシ通ずる念ねんこそ哀れなれ。■地程なく亭主門口ていしゅもんぐちから内外の者ども皆起きよ。■間屋殿まぐみだん屋殿組中残らず御座つた。かゝも起きて出やくと喚こゑに聲に出女ども。主婦諸共妻に出つる庄屋間屋口を揃へ。■おかたお聞きやれ今日の寄合よひあひは。是の小萬に就いて代官所のお差紙。小萬が父親横田の彦兵衛。四年このかた二石二斗の御未進ごみじんにて水牢みづらうに入れられ



たを。小萬が願ひ請負ひ
 糸出牢仰せ付けられた。
 宿中としてきつと取立て
 納めませいと則ち小萬を
 お預けらや。ようお聞き
 やれと云ひ渡す小萬俯向
 き涙ぐむ。女房も驚きて
 おとましいこと仕出しや
 つて。主に厄介一文もこ
 ちや知らぬ。上り下りの
 旅人家も關の小萬と云ふ
 名にはちて。百やる人も
 二百やる一匁の貰ひも鷗
 尻に取りをる。百目や二
 兩は半年にも溜れども。
 與作と云ふ博奕博の盗人
 めに。有りたけこたけ仕
 上げて夏物は半昇に襦
 袢が一枚なささうな。與
 作が懸が餘性ある皆己れ
 が請合ぢや。帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ。
 酒が四升五合十文もりが七十杯。芋と鯨の
 煮賣が八十五杯。地食ひも食うた蒟蒻の田
 樂を百五十串。蒟蒻の錢ちやとて砂にして
 すませうか。盗人におひなればこの出入は
 こちや知らぬ。與作めが身の皮剥いでも二
 石二斗が物はない。馬を質に押へて彼奴に
 きつと濟ませ。小萬を内へ入れておきや
 皆御大儀でござると。辭儀もそこ〜戸を
 立て、フン銚さす音こそきびしけれ。地庄
 屋間屋組頭さて〜與作と云ふ奴は。存じ
 の外の大食旅籠から盛切から。蒟蒻くうて
 煮賣喰うて其の間に小萬と云ふ。お山を夜
 食に喰ひをるとオツリめん〜宿にぞ歸り
 ける。フン與作は肌。地冷汗流しやう〜
 這ひ出で櫛の節穴。節の隙間のぞけ〜
 ど見えばこそ。竹籠子の出格子にスエテ首
 を伸して取り付けば。地内より顔がによつ
 と出るちやつとひけばア、大事な〜。
 コレ地わしちや小萬か與作様か今のを聞い

てくだんせ。悲しい事になり果て籠の鳥に
なりました。わしがかうなる上は父様へ難
儀はもうかゝらぬ。こな様にあふ事はなら
うやら成るまいやら。是が別れにならうや
ら。下から上ははかられぬとラシ手に取
り。付いて泣きければ。同イヤ是雲に汁が
出来てきた。どうした縁やら三吉めが與作
と云ふ名に惚れて。常におれを大事にす
る。乗物の内でたらし込み隣に泊つた大名
の金を盗んでくれまいか男と見込んで頼
むと。地のほせば此奴がのほされし成程盗
んでくれうといふ。なれば上々ならねば
元と。云ひもあへぬにいやくく。同人
迄罪におとす事止しにして下さんせ。ハテ
氣の細い願れて。地あいつが撰たる、分三
吉いよいよ頼んだ。引かせはせぬと云ひけ
れば。調はれやれやれくくしちくどい。
盗んで入らずば棄ちやいの。此のじねん
じよが頼まれて引きはせぬ。ハテ親はなし
一門なし拳固取より小さい首。地意氣づく

なら取つて行け盗みして願れ。首切らる、
が不思議かと義を立て抜きし。侍氣。盗
む黄金もくちせざる。フシ筋目恥かし哀れな
り。地テ、頼もしい命かけて頼んだとあり
だけそやされ。同ハテイ味方があれば氣が
後れる何處ぞへとつと退いてるや。ヤア小
萬女郎この守が預けたい。ハテ守は掛けて
るやいの。いやく是にはわしが本名が
書いてある。若し願れて捕らまへられ人
に見せれば恥辱ぢやと。地解いて預けし神
妙さ裾ねちからけて忍入る。坂の下の彌六
が方へ退いてるて。夜中時分に戻らう小
萬も這入りや。わしやあぶなうてきやきや
する南無地藏様く。エ、今願立が利くも
のが。聲が高いひそかにくひそくと。
胸はだくく凸凹のオクリ坂の、下へと別
れる。地武家は道中控にて半時がはりの
柏子木の數も九つ十に餘るやあまらずの。
子供心の愚かさは盗み了せし嬉しさに。
柏子木を除けもせず金襴の財布提げなが

ら。門口へすつと出る夜廻りもらりと氣を
付けて。慕ひ寄れば狼狽へし乗物に逃げ入
つて。内より戸をぞさいたりける夜廻りつ
つて飛び付き。同乗物の戸をしつかと押
さへ。簾を揚げてヤアうぬめか。是は御前
のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗
んだ。出會へ出會へと呼ばはりし是ぞ此の
世の地獄落しフシかゝる鼠の如くなり。地本
陣の上下残りなく下宿の諸侍。隣町隣
家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて断けつげ。
街道の真中に乗物かき据る高提灯。あた
り厳しく取巻きたり。同當番下知して。丁
稚づれに仰山なそれ引出せ。地長つたと荒
子ども戸を明けてサア出ませいと。小腕取
つて引出す。同旦那殿盗んだ金は返します
と。地きよろりとしてぞゐたりける。いか
様にも幼少な。彼奴ばかりではあるまい。
同同類を穿鑿せん馬差は居らぬか。當宿に
泊つたる馬子ども残らず召し寄よ。地あい
と云ふより觸れまはりフシ皆皆一所に相詰

むる。地八藏も大酒たしほして背より關に泊りしが。盗みかかはくは何奴なにやうぢやいやアませのじねんじよ奴か。己れなら尤もろくで果てまい奴ぢやと。常に云うたが違うたか。馬方仲間の恥さらしエ、磔はりつけ柱めと。地脊骨をどうど踏みければ俯向うつむけにかつぽと伏し。額を石にすり破りフシ血は紅くまと流れたり。無念な己れ踏んだか肢骨あたまもいでくれうと。立ち上ればひつすゑひつすゑ。調あやまそこな馬子めも慮外者。武士の前にて脛三昧すねまいとさんぐに叱らるゝ。地エ、あいつに踏まれたか下々の刀でさへ。切られまいと思ふに脛にかけて此の様に。顔に疵を付けたなあ。首がとんだら己れが面へ喰ひ付いてくれうぞと。はつたと睨む目の中に無念涙をはらくと。思ひ込んだる腹立の。をさな心の念力はフシぞつと身の毛も立ちにけり。地母お乳人聞き付けて。駈出で見れば大勢に取とり圍まれし我が子の體。あつとばかりに腰も抜けスエテ呆れて。泣くより外はなし。

地人々に悟られては今まで包みしかひもなく。お姫様の乳兄弟馬方して盗みしてと。いはれんも口惜しく不便ふびんさ憎さ腹立ちさ。ヤイ調そちは國から目を掛けて。情なさけを加へたかひもないさもしいことを仕出したな。筋目も有りそな者なれども流石育すくもが恥かしい。地其の心故親々も知つても知らぬ見ぬ顔して。其の馬方とはなりつらめ此方も子を携もち覺えがある。皆親心は同じこと若し母などが聞き付けても。我が子の命を助けん爲火水の底へは沈まうが。この場へ助けに出らるゝ物が見殺しにする様なれど。心の中では神佛かみぶつに命乞してもがくぞや。年にも足らぬ心から恐ろしい事する筈もない父親ちちが貧ひんしうて。云ひ付けて盗ましたか但しは人に頼まれたか。言譯あらばしてくれよ母の心を推量し。この頃の馴染もあり。鬼に角命が助けたい。姫様のお名を思はずばこのお乳が生んだ子で。姫様の乳兄弟と云うてなりとも助けたい。どうなりとかうなりと言譯あらばしてくれと。ギン魂たまごの底心の底肝より出づる憂き涙、當番吟味の人々に推量もしてくれかしの。心遣こころづかい目遣めづかいをフシそれとも知らぬぞ是非もなき。三吉も母の顔。見上げ見おろしスエテ涙に咽なみび居たりしが。調申しお乳様さもしい盗み致しても。馬方の事なれば誰恥かしとは存ぞんぜねど。地お前一人に恥かしい。父様の爲かとは恨めしの仰せやな。父様がある程なれば馬追は致さねども。在所ところ知らねばフシ顔も見ず。また母様も持つたれども女子の身の腑はらがひなさ。奉公人のはかなさは今では他人も同じ事。たとへ言譯立つてから盗人の名を取る見苦しい目にあうては。父様に顔は向けられぬ。はやう殺して貰もらひたい其の様ように仰しやられて。可愛がつてくださる程ほどどうやら心がうろたへて。死にともなり成りさうな奥へ入つて下され。もう顔見せて下さるなと。兩袖を目にあてゝ泣き沈みたる利發りはつさに。母はなほしも心くれ命はお乳

が貰うた。助けて下され侍衆とわつとひれ伏し聲を上げ。人の推量思はくも、フシ忘れ。はてゞぞ。泣き居たり。家老の本田奥より出て様子つぶさに承る。盗み物出づると云ひ、殊に道中他領の者。是しきの事評議に及ばず、地お助けなさるゝ立ち歸れと。引立つれば三吉、この恥かいて助けられ。なんと生きてゐられ、慈悲なら切つて貰はうと、フシ猶座を占めて立たざりし。

エ、小癩者輕い科を成敗とは。古今の掟にない事。立つて失せうと怒らるゝ。ム、この分ではどうでも命助かるの。ヲ、聞えたつゝと立ちこりや八藏め。己れは俺をよう踏んで面に疵を付けたな。地元來我は武士の子ちや人に踏まれて生きてはるぬ。覺えたかと云ふ詞のうち中間が脇差ひらりと抜き。飛びか、つて八藏が首打落せし早業は、フシ瞬く間の稻妻なり。地すは人殺しと取つて伏せもうこの上は料簡なしと。本繩に縛り上げ宿の庄屋へ預け置く。

この方よりも人をつけ代官所へ渡すべし。立ち上れと引つ立つる母は性根も泣き入りて。前後も分かず亂るれど。このお目出たい道中に繩付などは見ぬものと。人に誘はれ力なく見返りくゝ奥に入る。子は又母を見送りて顔をうなだれ目をふさぎ。聲をも立てず歎きしがム、これぞ本望々々。地惡名取つて人には踏まれ助けられても生きて居ぬ。一人死ぬより人切れば往にがけの駄賃ちや。父様も母様も誰も一度は死ぬるもの來世でゆるりと逢はうまであの世から來てあの世へ歸る。戻り馬やろいほつばらめと悲びれぬ。所存は侍まさりかな惜しい奴ちやと涙ぐみ。引いて歸れば本陣は。火の用心の聲ばかりオカリ物しづゝかにぞなりにける。フシ與作は取沙汰。地聞くとひとしく科を我が身に引受けんと。駈つけ見れども早落着してひそかなり。本陣も門しまりあたりもひつそと嬾まつたり。小萬待ちかね格子敲けば走りより。地どうぢや

く仕損うたけなのう。ア、仕損うた段かいの。わしやこゝから覗いた。地八藏まで殺いたわありや皆我等が身代り。明日の日に切らるゝけなかわいゝ事をしますると。泣き叫べば南無阿彌陀。そりや皆こちが殺すわ。こちとはいかい業人と。エテ顔を見合せ泣き居たり。地なう三吉より一時も跡にさがつてなるまいが。こなさんどう思ふぞ。ム、其の覺悟極まればもう落付いた満足した。宵からさうは思うたが親父の難儀を見捨てゝは。死なぬ氣であらうかと胸にばかり持つてゐた。心がかりは残りぬの。地ハテかう左繩になるからは父様の事も埒明かぬ。もじやくゝ云へば氣がもどる餘のこと置いてサア早う。こゝが出たうござんする。ヲ、嬉しいく裏の軒に繋いだ。馬を人手へ渡しては主たる人への不調法。死場へ馬も牽くまいか其の間に身の出る程。此の竹格子を放して見や。いやこゝも小よしの悪性でつ

い押せば離れる。地ア、く小よしは逢ふ夜の通ひ窓。最期近付く二人には冥途に通ふ鐵の門と。くときく馬牽き出し預けて置いた脇差は。そこらは抜からぬ私が腰にさいて居る。できたそれなら此の馬の鞍を踏まへてそつと下りや。ア、あぶないぞ怪我すなど。地かばはるゝ身もかばふ身も果つる廿日の月毛の駒の。尾髪亂れて置く露に袖の涙をあらそひし。ひらりと飛びおり一町ばかり足ばやに立退き。海道は往還伊勢路の方で死ぬまいか。ア、それに付いて待たしやんせ。三吉が預けし守袋。如何なる神の御札やらわしが懐にも大神宮の守御積。穢すは後生の障りなり。地地藏堂へ納めませうヲ、氣が付いたと取出す。浮線綾に紅梅裏の袋を開き月影に。讀んで見れば正一位小原太神宮。丹波の國の住人伊達の與作が一子與之助息災延命。地南無三寶さては三つで別れたる我が子の與之助なりけるか。我を親とは

知らねども與作と云ふ名を大切に。慕ひしものを氣も付かず盗みをさせて掬めにあふ。手を出して我が子の首を切つたと同じ事よとて。とんと坐して足すりしフシ聲を。上げてぞ歎きける。地女も共に涙にくれ。因果人とも業人ともようもく罪業を。重ねたは二人が身死なうと云ふ氣の付いたこそ。ままだも冥加に叶ふたれなんのかのと暫しでも。この世に居る程罪重し。サアござれヲ、さうぢやと。立たんとすれど腰立たず口惜しや腰ぬけた。エ、氣の弱いと引き立つれども膝折るゝ。抱き上げても腰折の地三十一期の憂き思ひ。最期は伊勢路育ちは近江。生れは丹波くりけ馬。夫を抱きかき乗せて妻は口取るはいどうく。今六道の次傳馬三途の川を打ちまたぎ。昔の小唄引きかへて間の土山死出の山。其途の旅路通し馬たどるや。夢の三重下之巻 與作小まん夢路の駒 與作丹波の。馬追なれと今は。野末の。

放れ駒ぢや。しやんとさせ與作。與作思へば引。照る日も曇る。關の小まんが。ギン涙雨か。しやんとさせ與作フシ與作々々と。地呼び呼ばれつる。稻負鳥もフシ音を入れて。野邊の苺萱軒端の荻馬の秣に伺ひ残す。フシオクリ草も我が身も。此の晩はオオリともに。枯野の轡蟲。スエテ人を乗せたが乗せられて。かぎりの旅の坂の下。なうあれ夜深に急ぐ乗掛も。泊りは知れてフシ四日市。地我は泊りもな、七日。中有の旅の馬羊。歩めしるくア、しぶとい口を。引けどしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば。最期を惜しむ綱すくみかや。歌私は十二で人呼び初めて。今年廿一まる九年。とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど。男女にいくたりか友のよしも時の花無常の。ナホス、フシ風に散り果てゝ。フシ馬より外に。とふ人も。泣いてくれるか優しやとフシ鞍にむれ伏しはらくと。スエテ袖には涙滑には。木の

實こぼるゝ椽本や。契り初めしは一昨年、
年拔參宮の道連に。歌をなした栴田の。眞
中ほどで。深き。思ひをやれ紫。帽子ほん
に口説いた其の眞實が。關の。地蔵を誓に
掛けて。戀の。重荷の。馬追ふともも。
足もかるゝ心らひろき。フシ豊受野とこ
そ。樂みし。あかれぬ中を秋の霜。今宵
ぎりごと氣もへりて窪田に浮名埋むかや。
サイモン歌 小まん泣くく。ヨイ 申す様縁は
異な物其の時に。起請 一枚書かねども雲
津の川瀬二世三世。指切りしての云ひか
はせ枕定めぬ參宮に。寢て居て胸を焼か
うより手を引きあうてゆるゆると。歩み
慰む ヨイ夕暮是一把の火繩に火を付けて。
相合煙管思ひ草思ひし。かひも夏の蟬。春
秋知らぬ世のたとへ。與作小まんが身の
上とフシ昔忍ぶの露涙。今を恨みの。うき
歎きこのもかのもにあのゝもの。阿濃の
松原しぐれ行く。阿漕の海士の。フシあこ

浦の。ふたつ石。清めし肌へ引きかへて。
地刃に穢し死する身の。形見となれや。石
塔の。歌標の石を思ひ出す。忌垣越え
しも戀の罪末社々々の宮巡り。地獄巡りを
思ひ出す。返らぬ昔思ふまい。泣くなく
と啼く鳥。人の末期を知らすとは地音に聞
きしが。フシ 今ぞ知る。朝隈の謀。あさま
しや。かの齋宮の忌詞いまはしやとて道も
せに。曝す身體を道者にもハツミ嫌ひ。憎ま
れ人々の。地よもや回向も情なや。歌過去
もエイ。未來も現世で知ると。男見る目は。
泣く目もと。ヤツサありや。そりやフシは
や男方の。お八つの太鼓の聲は高田の寺。
泊りくは多くとも。十萬億土馬次なし
の西は百味の旅籠屋に。觀音勢至手を取
りて蓮の。臺に泊らんせ。夫婦の外は相
宿も南無阿彌陀佛と。國府の阿彌陀の影た
のむ。其の誓願の詞の縁千貫。松にぞ
着きにける

きつと死に身に馴染すわり。土手へ飛びおり
馬を小松の根に繋ぎ。小笹の露を打拂ひ。
こゝへくゝと小萬が手を取り顔を眺め。
廿一と卅二人合せて五十二歳。地是でか
ら長生と云ふ程の年でもなし。いとしい人
を殺すよなう心にかゝり云ひたい事はない
かゝと云ひければ。ハテ可愛い男と死ぬ
る身が浮世に心なに残らう。さりながら只
一ついつて返らぬ事ながらと。云はんとす
るをア、もうくゝそれもうらぬ事。人間
の念感限りなく。息の通ふ間は六根の樂
慾にひかれ。思ふ程云ふ程なほ盡さず皆罪
障の種となる。この念を拂ふを生死を離れ
涅槃門に入ると云ふ。我とてもいひたい
こと千萬無量を打捨てたり。地されども一
つの粗相にはそなたに預けし箱枕に。先祖
の由緒所々の軍功知行付の一卷あり。死後
に諸人に蔑せられ家名を流さんこの無念。
よしそれはまゝにもせん不便や可愛いや
與之助が。最期まで親とも知らず親戀し

父親戀しと。想ひ死に殺されん其の思ひは親の業。親ではなくて敵ぞとスエテかつばと伏して。泣きければ。地それわしには云ふなくとてこな様云うて泣かしやんす。そんならわしも父様が年寄つて子を先立て。途方があるまいとしほや。ヲヲ念を残すが迷ひなるとへ奈落に沈むとも。親の事と子の事が思はず云はずにのられうか。地さうでござるさうぢやもの。いつそ云うて罪作り親の爲子の爲に。地獄へ落ちてやりませうと二人ひつしと抱付き聲の限を豊受野の。フシ風も哀を添へにけり。地あれくあれへ見える早提灯走り飛脚と覺えたり。道端は如何なりいざ最期場を變へまいかと。半町ばかり草わくる飛脚どもは汗水にて。お乳人の御立願明日四つ迄に。地命乞ひの太々神樂御願かなへば御祝儀の。御褒美は知れた事フシ急げく走り行く。地あれ聞きやつたかいつがたのお乳人。命乞の御願とは養

君の煩ひか。地いらぬ命が二つ有るア、換へらるゝ物ならばと。悔めば小萬涙ながらそれがかなふ程ならば。餘所の子よりもこつちの子切られて死ぬる身代りに。とても死ぬるこの身體髪頭より爪先まで。一分試しに試されても代りたい助けたいと。歎き沈みし誠の心。百千萬の祈よりフシなどが祈禱にならざらん。地時に人足四五十人ひそめて來りしが。ヤア御主なき馬の夜中といひ。繋ぎれあるは訝し、地提灯立てよと呼ばはつて。忍び提灯さやはつせば。フシ萬燈會のごとくなり。地遠くはあらじ一二町野を狩れと大勢が。與作小まんと聲をかけ洩るゝ方なく取巻きたり。南無三寶見付けられでは二度の恥。いざ死なんとひらりと抜く。万物の光りそりやこそとお徒士衆。やにはに二人を縋り留め兩方へ引きわくる。地やれ侍ならば情を知れもとは伊達の與作ぞ。一所懸命の時節到來死損なはせくれるか。地エ、口惜しいと身をもが

く。遙か彼方に立てられたる乗物より御意を請け。若侍走り寄り。地ム、珍らしい與作。古傍蓋登坂左内見知られつらん。今度姫君關東御下向御悦びの時節。今夜の始終御憐愍淺からず。吟味仰付られしに小まさんが箱より貴殿の實名あらはれ三吉事も實千與之助に紛れなく。殊に内室お乳人神妙の志かれこれ感じ思召し。三吉が命を助け母儀も同じく御供にて。兩人を助けたため忝くもあれまでお乗物を出だされた。地大殿の御前相濟むまで五十人扶持の御合力小まさんもお家へ引取り。重ねてよろしく御料簡あるべしとの御意の趣。有難う存じサア。お乗物のお供して、シ歸られよとぞ述べにける。地與作草むらに頭を着け。地大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく。不奉公の天罰にてあらぬ體に成り下り。親子も知らず恥辱の屍を曝すべき所。姫君の御哀憐生々世々に忘れ難し。さりながら女どもも悴も。人の笑はぬ心ざしも立

てたるに。拙者は何を面目に。おめくくと
諸人に生顔が合はされん。 地傍輩の情に

死んだ後と御披露あれ。 最期のお暇申し
請くる小萬が事はその代りに。頼み存する

左内殿と云ひもあへぬに是々くこの小
萬に残れとはお内儀様の思召し。 地わた

しばかりに恥曝せか一人歎けか物思へか。
口で云へば人そばへ先立つて埒明けうと。

取付く脇差押し止めさうちやく。 思も禮儀
も忠孝も死ぬる身には糸瓜の皮。 こゝへ

寄れ南無阿彌陀と。 刺違へんとする所を
左内飛入り脇差もぎ。 二人を兩へ踏倒

しはつたと睨んで齒嚙みをなし。 間ヤイ
道知らずの人外め。 さすが以前は御家中

の物頭采配まで御許され。 二つ道具をつ
かせし身が。 心まで上々の馬方になつたよ

な。 諸傍輩多けれども親左近右衛門が烏
帽子子。 與作といふ名を付けたれば。 こ

の左内とおのれと兄弟分が口惜しい。 死
なうくとやかましい死ぬるが左程珍ら

しいか。 弓馬の家の死といふは。 城攻の

一番乗野合せ軍の一番鎗。 よき敵の首取
つて討死するを侍の。 死に悪い死とはい

ふぞ覚えて置け。 地關の小萬と心中の討死
を手柄とは。 一切經にも無いこと僅かの恥

を思はんより。 主君の恩を報ぜぬは侍たる
身の大恥と。 知らざるかさてあましましや後

指をさゝれうが。 犬畜生といはれうが我が
身の恥を振り捨てて。 厚恩の主君に忠節を

勵むこそ恥を知つたる侍大丈夫の武士の。
生粹といふもの。 ぞこの道理合點なく。 死ん

で勝手がよいならば左内は留めぬ心任せ。
間さりながら侍ならぬ馬方を及て死なすは

勿體ない。 地舌を喰ふか身を投げるか假合
うた様に在郷馬の。 口取綱で首縊れ情に

見物して遣らう。 エ、侍でもない者に。 心
を盡して氣が盡きたと、フシ大欠伸して居た

りけり。 地與作わつと泣き出し誤つたり左
内殿。 この仕合せの上なれば心も闇と罷り

なる。 萬事責殿に任せて置くと、ステエ手を

合すれば膝立て直し。 間合點いつたか過分

々々それでこそ與作なれ。 御前は拙者が受
取つたと大音上げて。 與作は御意を重ん

じ生害思ひ止まる由。 御披露あれ女中衆
と地呼ばはれば御乗物。 さんざめかいて昇

寄するお乳人も與之助も。 流石武士の子
武士の妻御前なれば手を突いて。 四人目

と目を見合せ何事も姫君様。 御慈悲ゆゑ
とばかりにて、フシ嬉し涙にむせびける。

姫君輿の内ながら與作丹波の伊達男と。 歌
にうたふはあの人か。 關の小萬も雙紙に

ある繪で見たよりは好い女房。 聞けば踊
が上手ちやけな明日は一日逗留せう。 踊を

をどつて見せてたも。 家老どもに云付けて
知行をたんと遣らせうと。 生れ付いたる御

詞その一言に千石千兩。 千貫松の千代に
八千代によろづ與作が諸果報。 小萬が戀も

通り町仕合せ好して今はお江戸の刀差ら
や。 しやんと一筆ふみ馬御免踊り子寄する

笛鼓。 馬も太鼓もうつくしき。 踊り浴衣

の上から下まで色めき悦び 三夏へ賑へり。

與作 踊

クドキゑい〜〜〜紺屋の徳兵衛。房に元よりこひ染めこみの内の身代灰汁でも剣けず。口入頼みて銀四百目を。假に雇うて女房と名付けあはう三太をらむゆけん太で。やまけふづくる内儀の心。男いとしゝ子も又可愛い。客い隠居の手前をつみ。宵寝する子を我が夫ぞと。フシいひまけ濟ます鬢かづら。徳兵衛不義ぢやと逸まるきほひ。顔は溢面ぐめんもいらす。羽織ひらりとやつ。やつ。この〜この〜我が子のこの〜胸ぐら取つて。引きずり出だす。ナホス背より積もるうき涙。理づめ義理づめ情づめ。如才内儀の貞女にめでて。クドキ金も投げ出しふさとの中を明日は神明今宵の月ぞ。思ひ切つたと誓言すれど。今宵ちぎりの戀風は引。生姜酒でも。フシふせがれず引氣もふは〜の玉子酒。おまゝよ往つてのきよ。さうもなるま

いか。どうせうかうせうが酒。辻にしよつつくばうて。思案なかばし戀しさまさる。胸かきまはす玉子酒。心二つに打ちわつて君が方へと走りゆく。跡は内儀がナ一人寝てさ。オドリふさは日暮れて人待つ隙の。火廻しすれば。飛脚がせがむ。肥後屋の迎ひはや疾く徳兵衛。兄の病氣を見舞顔で。來ても互の心の底はいふに云はれぬ鶯の立たんとすれば。病者の癖の長話。なんとせんきのあら腹痛や。痛や〜と空腹病めど。空寒き夜に。是非に泊れとゆふ霜の奥の炬燵にふとんと轉けて。泣いて忍ぶは隣の二階。そろり。〜。そろり。〜。〜。差足は。誰ちや房か。地徳様かいの。是は夢かと抱き付き緋り憂を呟き辛さを口説き。死なでかなはぬオドリ。身の差詰と成り行く果そ。哀れなり。引房を背中に大屋根傳ひ。足もよろ〜。夜は何時ぞ。七つ八つ。芝居の仕組。浮名ばかりは残れども。タ、キ残らぬ物は命ぞと。いと〜涙のたる

屋町。おりてふたゝびこの婆婆へ。いつか高津のフシ日進様で。南無妙法蓮華經。南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經蓮華一つと脇差を。胸に押し當て只一刀。あつと叫びし一聲に。づんぶり染めの紺屋の徳兵衛。お房が頓生菩提の回向。水を手向けてふたたび盆を。重井筒と名の立つにさ。千歳樂萬歳樂踊り悦ぶ御代ぞ。樂しき。

右此本者爲懸望文句
音節等悉校合加秘密
令開版者也

竹本筑後掾

大阪天神橋筋泉町

正本屋七兵衛板